法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-15

資料調査に基づく日本中世における印刷文化の基礎的研究

大塚, 紀弘 / OTSUKA, Norihiro

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2019-06-04

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６９１３

研究課題名（和文）資料調査に基づく日本中世における印刷文化の基礎的研究

研究課題名（英文）Basic study of printing culture in medieval Japan based on material research

研究代表者
大塚　紀弘（OTSUKA, Norihiro）

法政大学・文学部・講師

研究者番号：１０４６８８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：第一に、版本の書誌学的な研究として、中国唐時代および宋時代に撰述された戒律関係の仏典を集成した律三大部を主な対象とし、資料調査に基づいて版本の流布状況を明らかにした。第二に、版画の図像学的な研究として、六字名号および阿弥陀三尊来迎図を主な対象とし、資料調査に基づいて版木と版画の相互関係を明らかにした。第三に、これまでの研究成果に基づいて、著書『日宋貿易と仏教文化』を刊行し、論文「鎌倉時代の日宋交流と南宋律院」などを公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本中世の版本、版画などの印刷メディアについては、資料調査が蓄積されつつある一方で、歴史像を描く素材としては、十分に活用されているとは言い難い。本研究で、資料調査の成果に依拠しつつ、日本中世の印刷文化の一端を具体的に描き出したことには、学術的な意義があると考える。また、東アジア文化史・社会史の構築を念頭に、東アジア世界という広い視野に立って、日本中世の印刷文化について追究したことには、社会的な意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：First, as a bibliographic study of printed books, the three major parts of Ritsu, which collected Buddhist scriptures related to religious precepts compiled in the Tang and Song periods of China, were taken up as the main object, and the distribution situation of printed books was clarified based on the research of materials. Secondly, as a pictorial study of woodblock prints, the relationship between woodblock prints and woodblock prints was clarified based on the research of materials, mainly focusing on the six-character myogo and Amida Sanzon Raigo-zu. Thirdly, based on the research results to date, I published a book 'Japan-Song trade and Buddhist culture' and published papers "Exchanges between Japan and the Sung Dynasty in the Kamakura period and the Ritsu-in Temple in the Southern Sung Dynasty" etc.

研究分野：日本史学

キーワード：印刷　版本　版画

１．研究開始当初の背景

(1)平成 26 年度から平成 27 年度まで、科学研究費助成事業（若手研究Ｂ）の助成を受け、研究課題「日本中世前期における版本文化の基礎的研究」に取り組んだ。その主要な研究対象は、中国版本とその系統を引くと推測される日本の版本と転写本である。鎌倉関係の版本についての研究成果は、論文「中世鎌倉における中国文化の受容―版本・輪蔵・碑文を題材に―」で公表した。戒律関係の仏典に関しては、論文「中世律家の出版事業と律法興行」で研究成果を公表した。また、リュブリャナ（スロヴェニア）で開催されたヨーロッパ日本研究協会（EAJS）の 2014 年国際会議で、ヨーロッパ所在の日本美術のうち、仏画の刷物を取り上げ、「Analysis of Japanese Buddhist paintings in Europe based on textual data」と題して発表し、発表の内容をまとめた英文の論考が刊行された。資料調査の対象として重点的に取り組んだのが、律三大部と呼ばれる中国唐時代および宋時代に撰述された戒律関係仏典の一大集成である。それらの版本は、京都市の泉涌寺、高山寺、東寺、奈良市の東大寺、唐招提寺、宮内庁書陵部、横浜市の称名寺、岐阜県郡上市の長滝寺など多くの機関が所蔵している。このうち、泉涌寺所蔵版本については、泉涌寺当局の全面的な協力を得て、調査および写真撮影を終えた。これまでは、刊行場所が中国か日本かの判別に関して説が分かれるなど、性格が不明確であったが、調査および考察の結果、中国版本は１点にとどまること、日本版本はいくつかのまとまりに分類できることなどが明らかとなった。これらの成果をまとめて、平成 27 年度に科学研究費研究成果報告書として『泉涌寺所蔵律三大部版本調査研究報告書』を刊行した。

(2)中世印刷文化の全体像を描くには､版木を用いて多量印刷するという点で版本と共通する版画や刷物（御札）も対象に含める必要がある。それらは、版本以上に広く受容されており、社会に大きな影響を及ぼしたと考えられるからである。中世の版画・刷物の研究は、美術史学の分野で、資料調査に基づいて着実に進展している。だが、近年の専門書としては、内田啓一氏の『日本仏教版画史論考』（2011 年）が挙げられるのみで、包括的な研究が不足している。資料調査の成果をふまえつつも、文献史学、仏教学の成果と合わせて新たな日本文化史、日本社会史を描く素材として活用されるべきである。

２．研究の目的

(1)本研究では、日本中世の印刷文化史を再構築すること、すなわち中世における印刷メディアの実態と歴史的意義を明らかにすることを目標とする。対象時期を中世全体に広げ、版本に関する研究をさらに進展させるとともに、これまで視野に入っていなかった印刷メディアをも対象とする。特に、印刷メディアの大半を占める仏教関係のものを対象に、基礎的な調査・研究を進め、一定の全体像を提示することを達成目標とする。具体的には、①版本に関する研究を継続するとともに、②新たに版画の研究に着手する。①としては、これまでの調査および研究を継続する。すなわち、第一に、中世版本の情報を集成・整理するとともに、中国版本およびその系統を引く戒律関係の日本版本を中心に資料の調査・研究を進める。引き続き調査報告書や目録の形で公表されている情報を集成し、すでに作成した中世版本の所在および書誌情報などを網羅した一覧を増補する。第二に、泉涌寺所蔵版本の調査成果をふまえ、その他の機関の所蔵する律三大部版本の資料調査を継続し､それぞれの版本の性格を明確化することを目指す。②としては、中世の印刷メディアの大半を占めた版画を研究対象とし、現存資料を調査するとともに、社会的な受容の実態について研究する。特に、中世に広く流布したとみられる独特な様式の阿弥陀如来立像と不動明王立像を題材とし、現存する版木と版画および関連する石造物を調査・研究し、図像流布の実態を明らかにする。

(2)資料調査と関係史料の網羅的収集と読解とを並行して進め、総合的に検討を加える。それを実現させるためには、自身の専門とする日本史学を基本としつつ、書誌学、美術史学の分野で蓄積されてきた調査・研究の成果を積極的に摂取し、かつ当該分野の研究者に助力を求める必要がある。したがって、学問横断的な研究に発展する可能性が高いことも特徴である。版本を中心とする印刷メディアの資料調査は、着々と蓄積されつつあるが、それぞれの情報共有が実現されているとは言い難い。したがって、本研究で、個別調査の成果を集成し、日本中世の印刷文化に関して、全体的な見取り図を提示することには大きな意義があると考える。また、東アジア世界という広い視野に立って、日本中世の印刷文化を考察した成果は、新たな東アジア文化史・社会史の構築に大いに資するに違いない。

３．研究の方法

(1)輸入宋版の資料調査および研究を行なう。中国文化受容の窓口になった中世の寺院は、仏典などの版本や版画を大量に輸入・蓄積するのみならず、活発な出版活動を展開した。その結果として、寺院などに今も伝えられている版本・版画およびその版木あるいは転写本が資料調査の対象となる。デジタル画像による詳細な比較検討のため、書誌学的な調査のみならず、デジタルカメラによる撮影を行なう。重点的に資料調査の対象とするのは、長滝寺（岐阜県郡上市）の所蔵する版本である。同寺は、宋版一切経のみならず、中国南宋時代に刊行された『四分律随機羯磨疏』『釈門帰敬儀通真記』『阿弥陀経義疏』『法華玄義釈籤』『摩訶止観義例纂要』の版本を所蔵する。だが、宋版一切経以外は、未だ書誌的な調査が報告されていない。特に『四分

律随機羯磨疏』は中国明州（現在の寧波）の印刷業者を示す印がおされており、南宋時代の出版業の実態を知る上でも重要な資料である。また、『釈門帰敬儀通真記』の宋版については、称名寺（横浜市）や東大寺（奈良市）も所蔵しており、律三大部版本と合わせて調査の対象とする。

(2)律三大部版本の資料調査および研究を行なう。律三大部版本は、先述のように、京都市の泉涌寺、高山寺、東寺、奈良市の東大寺、唐招提寺などが所蔵している。同じ律三大部版本でも、刊行場所が中国と日本に分けられるのみならず、一組揃っていても系統が異なるものが混合する場合が多いため、書誌的な分析をふまえた考察が求められる。泉涌寺所蔵の律三大部版本の資料調査は終えており、称名寺所蔵の版本のうち泉涌寺蔵本と関連する律三大部に重点を置き、調査を継続する。次に、西大寺（奈良市）の所蔵する律三大部を中心とする戒律関係仏典の版本を対象とする。そのうち、特に泉涌寺所蔵の版本と関係の深い版本を中心に、資料調査および撮影を進め、両者の関係に重点を置いて考察を加える。また、東大寺（奈良市）の所蔵する律三大部を始めとする戒律関係仏典の版本を対象とする。そのうち、特に泉涌寺所蔵の版本と関係の深い版本を中心に、調査・写真撮影をし、それぞれの性格について考察を加える。

(3)版画・板碑の資料調査および研究を行なう。恵林寺（山梨県甲府市）の所蔵する南北朝時代から室町時代の版木は、同寺宝物殿に保管されている。この版木に表現されている不動明王立像および二童子像などの図像は、南北朝時代に恵林寺の住持を務めた龍湫周沢が描いたとされる妙沢様の像容に基づくものである。妙沢様不動明王立像の作例は数多く現存しており、絵画のみならず版画も含まれ、禅宗と印刷文化の関わりを示す素材として重要である。そこで、これまで詳細な検討がなされてこなかった恵林寺の版木を調査し、妙沢様不動明王像の絵画・版画と比較して考察を加える。太山寺（愛媛県松山市）の所蔵する阿弥陀如来立像および不動明王立像の版木は、同寺宝物殿に保管されている。文字や梵字と像容を組み合わせた特徴的な図像で、銘文から永正 11 年（1514）に制作されたことが分かる。同様の図像の版画は、江戸時代以降のものしか知られないが、同様の図像を刻んだ板碑と呼ばれる石造物が現存する。妙楽寺（千葉県香取郡神崎町）にある文安 5 年（1448）銘の阿弥陀如来立像板碑と西福寺（千葉県佐原市）にある延文 5 年（1360）銘の不動明王立像板碑である。版木・板碑の両者から、これらの図像は南北朝時代以降に列島各地に流布したことが想定される。そこで、現存する資料を調査し、比較して考察を加える。また、六字名号および阿弥陀三尊来迎図の版画および版木を対象とする。版画（御札）の図像は、当麻寺の中之坊（奈良県葛城市）の所蔵する室町時代の刺繍六字名号および阿弥陀三尊来迎図を基にしたものと考えられる。同じく中之坊の所蔵する六字名号および阿弥陀三尊来迎図の版木を使用して版画が刷られた可能性があり、両者の比較・検討が必要である。そこで、版画と中之坊所蔵の版木を調査し、考察を加える。

４．研究成果

(1)版本の書誌学的な研究を行なった。第一に、天理大学附属天理図書館の所蔵する『明州阿育王如来舎利宝塔伝・護塔霊鰻菩薩伝』の版本を主な対象として研究を進めた。この版本は南宋代の刊行とみられ、冒頭に「高山寺」印があることから高山寺の旧蔵と判明し、『高山寺聖教目録』に見える「明洲〔州〕育王山霊鰻伝一巻」に当たると考えられる。賛寧が撰述した『舎利宝塔伝』と『護塔霊鰻伝』を合わせた書物で、両書ともに中国仏寺史志彙刊の『明州阿育王山志』に収録されているが、南宋版と文字の異同がある。そこで、両本を校合し、異同箇所について考察した。第二に、中国唐時代および宋時代に撰述された戒律関係の仏典を集成した律三大部の版本を主な対象として研究を進めた。泉涌寺（京都市）所蔵の律三大部版本については、基礎的な資料調査を終え、平成 28 年度に『御寺泉涌寺の中世版本―泉涌寺蔵律三大部版本調査研究報告書稿―』を刊行した。律三大部版本は、泉涌寺の他に京都市の高山寺、東寺、奈良市の東大寺、唐招提寺、横浜市の称名寺などが所蔵している。そこで、泉涌寺本と関連する律三大部版本に重点を置いて、それぞれの性格についての考察を進めた。特に、西大寺（奈良市）および東大寺（奈良市）の所蔵する律三大部を中心とする戒律関係仏典の版本を対象とし、泉涌寺所蔵の版本と関係の深い版本を中心に、両者の関係について考察した。その結果、泉涌寺所蔵の版本と関係の深い版本を数多く見出すことができた。

(2)版画の図像学的な研究を行なった。第一に、恵林寺（山梨県甲府市）所蔵の版木に表現されている不動明王立像および二童子像などの図像について、妙沢様不動明王像の絵画・版画と照らし合わせ、比較・検討した。第二に、太山寺（愛媛県松山市）の所蔵する永正 11 年（1514）銘の阿弥陀如来立像および不動明王立像版木の図像について、妙楽寺（千葉県香取郡神崎町）にある文安 5 年（1448）銘の阿弥陀如来立像板碑、西福寺（千葉県佐原市）にある延文 5 年（1360）銘の不動明王立像板碑の図像と照らし合わせ、比較・検討した。第三に、六字名号および阿弥陀三尊来迎図の版画および版木を対象とした。版画（御札）はスイスのジュネーブ民族学博物館が所蔵しており、法政大学国際日本学研究所の事業で構築された「在欧博物館等保管日本仏教美術資料データベース」（JBAE）に登録されている。その図像は、当麻寺の中之坊（奈良県葛城市）の所蔵する室町時代の刺繍六字名号および阿弥陀三尊来迎図を基にしたものと考えられる。同じく中之坊の所蔵する六字名号および阿弥陀三尊来迎図の版木と比較・検討した。その

結果、中之坊所蔵の版木を使用して、ジュネーブ民族学博物館所蔵の版画が刷られた可能性が高いことが明らかとなった。

(3)研究の成果を公表し、また公表に向けて準備を進めた。第一に、これまでの研究をふまえて、「鎌倉時代の日宋交流と南宋律院―律書版本と教学の伝播―」「『雨珠記』と正応四年の紀州由良隕石」「鎌倉南北朝期の一遍時衆と別時念仏」などの論文を公表した。第二に、研究成果を社会に還元する活動の一環として、『週刊仏教タイムス』2675～2684 号に「鎌倉仏教と印刷メディア」と題し、１０回にわたって小文を連載した（「印刷技術の伝来と発展」「興福寺の「教科書」」「版本一切経の衝撃」「明恵の見た「ウナギ」」「戒律の「教科書」」「禅院と渡来人」「『選択集』出版の波紋」「日蓮の見た『選択集』」「一遍の念仏札」「版本一切経と輪蔵」）。第三に、これまでの研究成果に基づいて、著書『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館）を刊行した。第四に、天理大学附属天理図書館所蔵『明州阿育王如来舎利宝塔伝・護塔霊鰻菩薩伝』の版本（南宋時代）について、『明州阿育王山志』（仏寺史志彙刊）所収本との校合を終え、対校本の公表が可能な状態となった。第五に、研究成果報告書の刊行に向けて執筆を進めた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① 大塚　紀弘、『雨珠記』と正応四年の紀州由良隕石、汲古、査読無、73 号、2018、pp7.-12

② 大塚　紀弘、日本中世における仏教宗派の共存と対立、史潮、査読無、新 82 号、2017、pp.46-61

③ 大塚　紀弘、鎌倉時代の日宋交流と南宋律院―律書版本と教学の伝播―、日本歴史、査読有、825 号、2017、pp.18-35

④ 大塚　紀弘・白川宗源、応安四年建長寺大衆申状写の紹介と分析、鎌倉、査読無、122 号、2017、pp.70-88

⑤ 大塚　紀弘、天野山金剛寺一切経の来歴について、寺院史研究、査読有、15 号、2016、pp.27-48

〔学会発表〕（計４件）

① 大塚　紀弘、鎌倉南北朝期の僧侶集団と密教、第 41 回智山談話会講演会、2018.11.28、別院真福寺（東京都港区）

② 大塚　紀弘、思想史研究とコスモロジー論、シンポジウム「日本中世思想史研究に明日はあるか」、2018.10.27、早稲田大学（東京都新宿区）

③ 大塚　紀弘、鎌倉南北朝期の天野山金剛寺と伝法会、第 56 回中世史サマーセミナー・シンポジウム「奥河内の中世を探る」、2018.8.22、河内長野荘（大阪府河内長野市）

④ 大塚　紀弘、無本覚心と紀州の海、紀州地域学共同研究会研究集会―2017 夏、2017.9.12 和歌山県立博物館（和歌山県和歌山市）

〔図書〕（計１１件）

① 大塚　紀弘　他（高橋典幸・五味文彦編）、筑摩書房、中世史講義　院政期から戦国時代まで（蒙古襲来と鎌倉仏教）、2019、266（pp.81-96）

② 大塚　紀弘　他（日本史史料研究会編、星海社、戦国僧侶列伝（象耳泉奘・覚恕）、2018、362（pp.57-68、pp.121-131）

③ 大塚　紀弘　他（日本史史料研究会編）、岩田書院、日本史のまめまめしい知識 第３巻（中世禅院の「のれん」）、2018、257（pp.43-50）

④ 大塚　紀弘　他（亀田俊和編）、洋泉社、初期室町幕府研究の最前線　ここまでわかった南北朝期の幕府体制（初期室町幕府と禅律方　禅院・律院を体制仏教の中心とした幕府の宗教政策）、2018、283（pp.220-236）

⑤ 大塚　紀弘　他（関口崇史編）、洋泉社、征夷大将軍研究の最前線　ここまでわかった「武家の棟梁」と実像（足利将軍家と石清水八幡宮　足利義教は、なぜ「籤引き」で将軍になったのか？）、2018、270（pp.185-199）

⑥ 大塚　紀弘、吉川弘文館、日宋貿易と仏教文化、2017、327

⑦ 大塚　紀弘　他（小口雅史編）、同成社、古代国家と北方世界（鎌倉時代の津軽安藤氏と蝦夷統治）、2017、383（pp.358-377）

⑧ 大塚　紀弘　他（永村眞編）、戎光祥出版、中世の門跡と公武権力（中世の曼殊院門跡）、2017、354（pp.88-125）

⑨ 大塚　紀弘　他（呉座勇一編）、洋泉社、南朝研究の最前線　ここまでわかった「建武政権」から後南朝まで（中世の宗教と王権　後醍醐は、本当に〈異形〉の天皇だったのか？）、2016、335（pp.225-246）

⑩ Otsuka Norihiro et al.（Josef Kreiner edited）、Bier'sche Verlagsanstalt、Japanese Collections in European Museums Vol.V －With Especial Reference to Buddhist Art －（Interpreting Buddhist Paintings and Prints in European Collections Using Textual Information）、2016、365（pp.37-50）

⑪ 大塚　紀弘　他（日本史史料研究会編）、岩田書院、日本史のまめまめしい知識 第１巻（西大寺叡尊の往生と蓮糸袈裟）、2016、270（pp.121-127）

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究分担者　なし
(2)研究協力者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。